祝　辞

日本学士院長　　長　倉　三　郎

本日ここに、天皇皇后両陛下の行幸啓を仰ぎ、内外来賓各位の御列席のもと、日本化学会創立125周年記念式典が、このように盛大に挙行されますことは誠に慶賀に堪えません。日本学士院を代表して心からお慶びを申し上げます。

日本化学会の前身である「化学会」が創設されましたのは、わが国が明治維新の大業を経て近代化の道を歩み始めてから未だ日の浅い1878年（明治11年）のことでありました。このことは明治政府とわが国学界の諸先達が西欧で育まれた現代科学の導入に情熱を燃やし、そのための施策を果敢に実行されたことを示していると存じます。その後1898年（明治31年）には工業化学会が設立されましたが、これら二つの学会が基礎ならびに応用化学の専門家集団として20世紀前半におけるわが国の化学ならびに化学工業の発展に尽されました数々の貢献を偲び、敬意と感謝の思いを深くいたしております。

第二次世界大戦の敗戦による困窮と変革の激しい流れの中で、わが国の諸学会は厳しい選択を迫られましたが、化学関係二学会は合同して日本化学会を結成する道を選び、1948年（昭和23年）に日本化学会が発足いたしました。この合同は、その後の学会の運営や化学研究における基礎と応用の融合、最近の産官学協力の流れからみて極めて賢明な選択であったと存じます。ご関係の先輩諸賢の卓見と長期的視点に立った大局的なご判断に対し深く敬意を表します。

合同により発足した日本化学会は定期刊行物や学術図書の刊行と電子化、各種の研究集会の開催、優れた研究の表彰、産官学協力の推進、化学教育の振興、公害、環境、安全問題に対する対応や社会に対する化学の普及啓発活動などを活発に推進し、わが国における基礎・応用化学ならびに化学産業の発展に多大の貢献を果されました。

こうした国内活動に加え、日本化学会は各種の国際会議の開催、国際純正応用化学連合やアジア化学会連合への協力、主要国化学会との共同事業の推進など、第二次世界大戦後の活発な国際活動を通して、世界の化学界におけるわが国の地位向上と評価を高めるうえで重要な役割を果されました。優れた個々の研究者の精進努力にこうした学会の活動が加わって、わが国の化学研究が国際的に極めて高い水準に到達しておりますことは、白川、野依両博士および田中氏によるノーベル化学賞の３年連続受賞に端的に示されていると存じます。この機会に心からお慶びを申し上げますと共に、これを契機にわが国の化学研究が益々活発に推進され、わが国社会の化学に対する理解と認識が深まることを期待してやみません。

人類社会は、20世紀における科学技術の目覚ましい進歩により、物質的に豊かで高度な生活を楽しむことができるようになりました。こうした光の部分に伴いまして陰の部分が顕在化し、地球環境の破壊と汚染が人類社会の持続的発展を危うくするものとして、大きな問題となっています。加えて「感情と情熱の萎縮」「深い思索の欠如」「伝統の崩壊」「競争の激化と人間性の衰退」をはじめ文明化に伴なう精神的汚染の可能性が指摘されています。

こうした文明化に伴なう人類社会の問題点の解決に当たりましては、人文社会科学を含めた広汎な学問分野間の協力が必要と存じますが、特に物質的汚染の解決につきましては、化学の果す役割が極めて大きいものと存じます。1977年に東京で開催された第26回国際純正応用化学連合化学会議に主題として揚げられた「人類の福祉のための化学」の視点に立って、日本化学会が化学ならびに化学産業の発展に引き続き御尽力下さることを切望してやみません。

本日の記念式典に当たり、創立以来125年にわたる日本化学会の歴史を回顧し、創設とその後の発展に英知と情熱をもって尽力されました歴代会長をはじめ会員諸賢のご功績に衷心からの敬意と感謝の意を表しますと共に、これからの益々のご発展を祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。